

**「新しい東北」官民連携推進協議会
令和5年度 岩手県意見交換会（第1回）議事概要**

令和5年5月18日
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】 令和5年5月18日（木）13:00～15:00

【場 所】 復興庁岩手復興局／オンライン（Teams）

【出席者】 （敬称略）

＜副代表団体＞（所属の五十音順）

株式会社岩手銀行／岩手県／国立大学法人岩手大学／特定非営利活動法人いわて連携復興センター

＜復興庁＞

復興庁 復興知見班／復興庁 岩手復興局

＜事務局＞

株式会社 JTB 総合研究所／株式会社 JTB

【議事概要】

1 開会

復興庁より、平成25年から取り組んできた「新しい東北 官民連携推進協議会」であるが、震災後13年目を迎えるにあたり被災地の状況は各県において様々に異なっているため、各県のフェーズに応じて官民でどういった取組ができるのかということについて、本年度も引き続き活発な議論をお願いしたい旨、挨拶した。

2 各団体の活動紹介

復興庁、特定非営利活動法人いわて連携復興センター、岩手県より、取組紹介資料（資料2-1～資料4）を基に取組を紹介した。

3 令和5年度のテーマ、取組み内容等について

（1）今年度の取組テーマについての議論

今年度の取組は、テーマを「沿岸と内陸を繋ぐ」とすることで合意が得られた。まずは三陸沿岸地域に足を運んでその魅力を知ってもらうことから始め、沿岸地域の課題解決にも繋げたいとの意見が挙げられた。また、取組内容を検討する際に取り入れるべき視点としては「若者」が挙げられ、若者と沿岸部の事業者やNPO等とを繋ぐような取組を望む意見が挙げられた。

（主な意見）

- ・沿岸と内陸部を繋ぐことは非常に重要なテーマだ。震災が起こる以前から、道路など交通ネットワークが今ほど発達していなかったため、例えば内陸部で発展しているものづくり産業をどうやって沿岸部に波及させるかという観点から、内陸部と沿岸部の製造業間におけるサプライチェーンの構築などにおいて課題があった。震災後、新しい交通ネットワークができたので、ある意味今がチャンスというか、沿岸と内陸部をより繋ぎやすい状況になっていると思う。作っていただいた道路等をどのように活用していくかという視点は県民としては有難く、非常に良い視点ではないかと思っている。
- ・岩手大学に『三陸委員会ここより』という震災後に被災地支援のために学生たちが作ったサークルがある。岩手大学には東北管内から約6割程度の学生が来ていて、6割のうちの4割が岩手県だ

が、それ以外の学生は東北以外から来ている。今 19~20 歳の学生は、十数年前は小学生で、東北に所縁がないとテレビの映像でしか知らない、東北に来たことがなかった子たちだ。昨年、『三陸委員会』がその子たちに対して、せっかく岩手の大学に入ったのだから沿岸の方に足を延ばして、沿岸で 12 年の間頑張ってきた人たちの話を聞き、岩手沿岸が 12 年経ってどのように復興しているのかということを紹介したいと考え、釜石市のバスツアーを企画した。三陸道ができて距離は縮まったが、「距離が縮まったから沿岸に行く」ということではない。沿岸に行くということは、「何かがある」というのがポイントだと思う。参加した学生は震災直後から今現在どうなっているかというところまでを知り、実際に三陸で活動している学生の声を聞いて、目から鱗が落ちたと感じたそう。そういった意味では、沿岸と内陸部を繋げることは今まさに必要なのかなと思っている。

- ・ 1 年間、学生のサークル活動を見ていて思ったことは、学生なのでイベントがやる取組とは違う。傍から見てみると企画の検討に時間がかかって公募の期間が短くなってしまったと思ったが、それも 1 つの体験だ。やってみて、「実はもう少し公募期間を取って学生を集めれば良かった」とか、失敗も成功体験の 1 つだと思う。そういった取組ができるのも若者の発信力、実行性なのかなと思っている。
- ・ 組織に所属する若者ではなく個人の若者、またサークルのような緩やかな団体に入っている若者を巻き込もうと思った場合、スケジュールが合っただけでは関わってもらえないため、そこには 1 つ、アイデアが必要なのではないかなと思う。例えば 1 年目は懇談会をやって次に繋げるとか、1 年目に企画して次に繋げるということであれば、1 年間、ある程度のフォーマットを作ることに参加するという段階で自分事になると思うので、そこで興味を感じた取組に対して 2 年目以降は中に入って主体的にやってもらおうといったように、協議会と若者たちとセットで取り組むと、組織的なところと若者の機動力みたいなところが上手くマッチングするのではないかなと思う。
- ・ 今までではどちらかと言えば「沿岸被災地でこれが足りない」という発信が多かったと思うが、フェーズとしては変化の時期だと思う。自分は仕事柄よくこちらに来ているが、内陸より楽しいのではないかなと思うことが多い。おいしいものや面白いプロジェクトなどを発信する時期なのではないかなと思っている。沿岸と内陸があってこそ岩手の魅力だと思う。内陸の人は沿岸のことをうらやましく感じている。海だけでも本当に尊くて大事なものだ。県内の皆さん同士でも、そういった魅力や資源を分かち合うようなことができればいいのかなと思っている。
- ・ 『若者カフェ』の事業主体は岩手県であるが、いわて連携復興センターが『若者カフェ』の事業に手を挙げた 1 つの目的は、若者という魅力的な力と沿岸の魅力的な事業者、NPO の皆さんなどが触れ合ってもらいたいということが動機としてあった。沿岸の方とは ZOOM で連絡をとることもできるので、参画する学生さんと沿岸の方が何かしら繋がることができると良いと考えている。例えば若者の皆さんが考えたアイデアを発表することで、それを聞いたパネルの方や事業者さんのアイデアに繋がることもあるかもしれない。そういった機会を作れると良いと思う。
- ・ 関係人口の増加という面からも、人を呼び込んでいけると良いと思う。道路ができて盛岡から宮古、釜石が近くなり利便性が向上した。また観光の面でも盛岡が NY タイムズの「2023 年に行くべき 52 ヶ所」に選ばれた。花巻空港では台湾への定期便の運航が再開されている。そういった中で、海外のインバウンドも含め、内陸にお住まいの方、隣接する県外の方などが「三陸っていいところだな」と魅力を感じるようなツアーができるといいのかなと思う。新型コロナもあり、復興が遅れているとは私も感じているところだ。見てもらいたい施設はたくさんあるので、そういうものを上手く組み合わせて関係人口を増やすような、人を呼び込める企画ができると良いと考えている。
- ・ 内陸や県外の方から、三陸に行ってみたいという声はよく伺うが、「行ったことはありますか」と聞くと「ない」と言われる。「三陸鉄道にも乗ってみたいが、乗ったことがない。テレビでは見かけている」といった話はよく聞くので、動機やきっかけさえあればいいのではないかなと感じている。現状、例えば内陸の方が三陸に行くか他に行くかと考えると、やはり縦の移動で、青森や宮城

など他県に移動することが多いのではないかと。それを阻止するわけではないが、「こっちにも面白いところがあるよ」とお伝えするのがいいのかなと思う。部分的に見れば陸前高田の道の駅でオープン以来の来場者が100万人を突破したり、起爆剤になっているものもある。では陸前高田に行った人はどこに行くのかというと、宮城から入ってきてそのまま内陸に行ったり宮城に行ったりと、単なる通過地点になっている。もちろん宿泊施設が少ないことなど整備が行き足りていない部分もあるが、みちのく潮風トレイルなど素晴らしい観光資源はたくさんあるので、あとは仕掛け次第かなと思う。それを誰に仕掛けるかということでは、女性や若者は行動力があるので素晴らしいのではないかなと思う。

- ・青森や仙台から縦に沿岸部を繋いでいくという考え方については、横の移動の道中に何もなくて時間だけがかかってしまう状況のため、我々のような外の人間が観光で来たときには沿岸部を縦に移動した方が上手く行程がくめるとというのが現状だろうと思う。横の移動にも何か魅力的なコンテンツを提供できると良い。
- ・岩手県人として観光でたくさんの方に訪れていただくことは嬉しいが、最終的にはここに住んでほしい、就職してほしいという想いがある。例えば岩手大学には他県から来ている学生も多くいると思うので、楽しい体験、やりがいのある体験を観光の中に取り入れて、「じゃあ沿岸の会社に就職しようかな」とか、学生に限らず「ちょっと住んでみようかな」といったことに繋がられる仕掛けがあると非常に嬉しい。企業とコラボしたインターンシップ、就業体験などが考えられる。どうしても横軸だと時間はかかるが、とにかく三陸でたっぷり時間をかけて体験してもらおうということを考えてはどうか。多少時間がかかっても、三陸でたくさんの思い出や、将来的に住んでもいいなと思うぐらいの思い出をじっくりと濃密に作ってもらえることができれば、横移動の2時間3時間は忘れてしまうのではないかなと思う。観光施設だけではパッと見て「ああ、そうか」で終わってしまう気がするので、何か体験型のものがあると良いのではないかなと思う。
- ・観光文脈で考えると1泊か長くても2泊で、その中で横移動が1.5～2時間かかるとなると観光客にとっては長い。しかし5日間や1週間のプログラムとして考えると、1～2時間の移動はほとんど気にならないのではないかなと思う。また県の取組の中にもインターンシップの推進などがあるのであれば、取り入れるべき視点だという気がする。
- ・学生の地元企業へのインターンシップ等の取組は大学も行っている。特に産業界と大学、官の連携を行っており、岩手大学と県内の12市とで協定を結び、体験など定期的にやっている。一方でインターンシップのような取組をこの事業の中でどういうふうに位置付けるのかというと、少し壮大だなと思う。
- ・釜石市の企業の見学ツアーは『ここより』の子に声掛けして、学生が1名参加したという話をされていた。そうしたことで沿岸の方に1つでも2つでも関わった学生は、また三陸の話があると興味を持って、「参加してみよう」というふうになると思う。
- ・『若者カフェ』事業の中身として、場所を活用してほしいということがあるため、この場所を使って若者が主体的にやっていただくとなれば、運営者であるいわて連携復興センターに相談しなくても目的に合う。ただ、そこに運営側として関与していくとなると県に相談が必要となる。
- ・沿岸の市町村単位では、移住等のコーディネートをしている方がたくさんいるし、インターンをやっている方もいる。そういうところと繋がられるといいのかなと思っている。

(2) 今年度の取組内容についての議論

事務局案として資料1に示した「案2：岩手県内の学生・若者が考える『今の復興の姿を知る、三陸沿岸学び旅・交流プログラム』」をベースとして今年度の取組を検討していくことで合意を得た。この際、学生・若者の学業や本業に負担をかけないような配慮が必要、また学生・若者が参加するメリットについても整理する必要があるという意見が挙げられた。こうしたことを踏まえ、事務局の果

たすべき役割等を含めて、実現に向けた検討を進めていくこととした。

(主な意見)

- ・案2が良い。枠組みとしては、まず「沿岸に行ってみたいけれど、まだ行っていない」など興味関心のある方々を、ある程度お声掛けするか公募という形で集める。沿岸の皆さんについてもそういったことに対して積極的、肯定的な方でないと難しいと思うので、まずはご協力いただける事業者さんなどに入っていただく。昨年度関わっていただいた浄土日和さんなど、連続性のある方々にも入っていただいて、交流しながら新しいプログラムを作るようなことをしてはどうかと思う。もしかしたら「来年はこれをしよう」という話も出てくるかもしれないが、今年度のゴールとしては、そうした交流の中で学生にプランを作ってもらって発表し合う。例えば学生が15人いたら5人ずつ3チーム作り、1泊2日のツアーみたいなものを考えて発表し合えば、行っていない人も「そっちにはそういうものがあるんだ」と知ることができる。事業者側も「そういうアイデアがあるんだ」とか、少し飛躍するかもしれないが「ウチで働いてよ」「今度手伝いに来ないか」というように、関係の発展のようなことがあるといいと思う。難しさはあるとは思いますが、イメージとしてはクラブ活動、サークル活動のような立て付けで入ってもらう。
- ・『三陸委員会』などは先輩方がやっていた活動をベースに、プラス今年はこのことをやりたいというふうに、自分たちでやりたい方向が決まっている。こうした既存で活動している先頭集団のサークルの層ではなく、「興味はあるが、まだやっていない。でも、そういう場所が提供されたのでちょっと入ってみよう、計画から組み立ててみよう」という子が15名いれば成り立つのではないか。こうした層の学生たちをどれぐらい集められるかが成功のポイントかもしれない。その子たちが企画を考えることから入るのはヘビーだと思うので、既存の取組プラス、もう1本大きな柱でやりましょうという団体・サークルがどれぐらいいるかについても探る必要。
- ・継続的な関わり方をするのは難しいかもしれないが、単発であれば、受けられる学生をそれぞれのサークルから出してもらうような緩やかなネットワークとして、『いわて学生ボランティアネットワーク』がある。そういうところに一度声を掛ければ、例えば1回目としてフォーラムなのかツアーなのかをやる際に参加してもらい、体験した後にアイデアをもらうというぐらいなら現実的にできるのかなという気がする。
- ・案2がよいのかなと思う。先ほど定住してほしい、就職してほしいと言ったが、それは最終的なことで、そのために何か事業をしようとするとなんか難しくなってくるだろう。三陸は楽しいということを知ってもらえる機会を作ることが大事という趣旨の話があったが、まさにその通りだ。まずは三陸を知ってもらいたい。先ほどの「体験型の観光を」という話からすると、ボランティアなどでもいいと思っている。観光施設を見て、震災関係の伝承施設も見て学んでいただき、更にそこでお祭りのボランティアをするなど、若者にいろいろな経験をしてもらうことで沿岸を好きになってもらえるといいと思う。
- ・案2は基本的にいいと思う。沿岸でしかできない体験を織り込むことで、より魅力的になるのではないと思う。
- ・学生は教育、研究が中心。復興など地域を支えるところでも若者は主体的な立場ではあるが、学問や教育のウェイトに影響があるような取組になってしまえば本末転倒なので、そこは十分注意しなければならない。震災後から見てきて思うのは、復興支援活動に純粋な子は自分のキャパを超えてでも被災地沿岸の人のためにやりたいという子が多い。そういう子だからこそのいろいろやってもらえるのだが、キャパを超えてしまって学生が潰れるようなことがあっては本末転倒だ。学生は主体ではあるが、中心の主体ではない。入る過程で学生にも何かしらのメリットがあるようなところは私たちがちゃんと守っていかないと、「新しい東北」の意味がない。事業を進める立場ではどう

しても若い方の力が必要になるが、背景として事務局側がそこを押さえておかないと続かないと思う。

- ・学生や若者に企画を考えていただく際、彼らに丸投げするとスケジュール管理が遅れたり、どこまでのめり込むかというところで本業への影響が出て来る。このため、「どうやってプログラムを考えるのか、その場をどう作り上げるのか」という部分を我々が整理する必要がある。時間・場所をセッティングし、その時間、しっかり議論してもらうという形をとる方がおそらくスケジュール管理の面でも良い。学生にターゲット的に声をかけるとしても全員参加ではなく当然自由参加で、広く募集をかけながら、集まってくれた人たちに一定の枠、時間を決めてしっかり議論をしていただき、ツアーを考えてもらうという方がやりやすいのかなと感じた。その枠組みをしっかり作ってあげることが、協会の本年度の事業として求められることではないか。
- ・学生にまるまる全部お願いするのは難しく、キャパを超えてしまう場合もあると思う。どういったところに学生や若者に関わってほしいのか、こちら側が提示する必要がある。関わってもらって若者の柔軟なアイデアをもらうということも1つだと思うが、一番大事な要素は、学生がこのプログラムを通じていろいろなことを学んだり、成長することだと思う。だから「ここからここまでは関わってもらう」というところを、お願いする側がある程度見通しを立てた上で提案することが必要ではないかと思う。学生が1から企画するのは結構難しいと思う。
- ・学生に考えてもらうのはツアーの内容だけでいいと思う。例えばミニマムであれば月に1回集まる日があって、そこで学生たちや沿岸事業者さんと意見交換をする。実践の場プログラムで全員で沿岸に行く日を作って、帰ってきたときに、実際に意見交換もしたし沿岸にも行ったので、「それならこういうツアーがいいんじゃない」というものを考えて発表してもらう。それぐらいミニマムなものでもいいのではないかと思う。学生たちにあまり難しいことや調整をさせるのではなく、純粋に1泊2日のツアーだけを考えてもらうぐらいでいいのかなと思っている。沿岸に1回行けるということは彼等にとって1つメリットだし、更にそういう方々と繋がる、沿岸について学べる。そういう志向のある方が、最初に公募するような方々なのかなと思う。
- ・沿岸部のどの事業者と繋げるのかについては、例えば、最初に学生に「こういうところがありますよ」という事業者のリストをインプットをしてあげて、学生が話を聞きたいとなった事業者に対して、協会事務局において、調整を行い、学生と話ができる状態まで持って行くということができるとよいのかなと思った。
- ・学生の本分を守ってあげなくてはいけないというところを考えると、事前にきちんとカリキュラムを構成して、事務局としてどういうサポートができるのか、「こういう団体をご紹介しますよ」とか、そういう情報提供をしてあげるところまでを次回の意見交換会までに作っていく必要があるのかなと感じた。また、月1回程度のミーティングではなかなか進まない部分があると思うが、例えば15人いたら5人ずつの3グループという形で動いていただき、月に1回は少なくとも1グループから1人出て来てくれれば、あとは学生が各自で集まってプロジェクトを進める。進捗報告とこちらからのインプットを含めて月に1回集まるという形で、学生が自発的に動きつつ、事務局がそれをきちんとサポートしていく。かつ、事前にカリキュラムとして構築して、学生も大学の教員も携わっていただきやすくする。そういった必要があるのではないかと思った。
- ・それぞれのサークルで今やっていることもあるので、もともとの活動を主体に考えないといけない。今ここで学生の意見を聞けないのでわからないが、負担感がないのであれば、ある程度1年目のところはやりわりとやって、そこで興味があれば次の話になると思う。『いわて学生ボランティアネットワーク』がネットワークとして興味を示して参加できるのかどうかなど、代表との打合せが必要だ。

4 閉会

今年度の取組テーマ・内容について一定の合意が得られたため、今回の論点を踏まえて、事務局において、副代表団体や地域の学生ネットワーク等と、具体の調整を行っていくこととした。

第2回の協議会は8月17日の週をめどに開催することとし、最終的な日程については事務局において調整することとした。